

2026 年度

愛知学院大学大学院

文学研究科

英語圏文化専攻

一般入学試験問題

解答および解答例・出題の意図

博士前期課程 秋季入学試験

一般入試 (2025年10月4日実施)

【専修科目】

英語英文学研究 (I) (英語教育学研究)

〈模範解答例〉

1. ジグソー法では、まず学習者を「ホーム (元の) グループ」に分け、学習内容を複数のサブトピックに分割する。各メンバーは自分に割り当てられたサブトピックについて、同じ課題を持つ他グループのメンバーと集まって「エキスパート活動」を行い、資料の読み取り・情報整理・要点把握などを通して専門家としての知識を深める。

その後、メンバーは自分のホームグループに戻り、自分が学んだ内容を他のメンバーに説明する「ホームグループ活動」を行い、グループ全体で全サブトピックの理解を共有する。この方法により、学習者は①他者に説明することで自らの理解を再構築・深化でき、②仲間から補足説明や質問を受けることで多面的な理解が促進される、という効果がある。

2. メリットとしては、①相互教授を通じて学習者の主体性・責任感が高まる、②協同的な学習環境が形成され対人スキルやコミュニケーション能力が伸びる、③複数の視点から学習内容を理解でき深い学びが得られる、などが挙げられる。

一方、デメリットとしては、①各メンバーの準備不足や説明力不足により情報の質がばらつき、②時間や指導上の調整が難しく授業運営に工夫が必要、③グループ内で責任分担が偏りやすい、などがある。

3. 従来のジグソー法は、主として分担学習・情報共有を通じた理解深化を目的とし、各エキスパート活動では割り当てられた情報を整理・把握することが中心である。

これに対し知識構成型ジグソー法は、情報の単なる伝達にとどまらず、学習者が複数の情報や観点を統合し、新しい概念や説明を共同で構築することを重視する。エキスパート活動でも複数資料を比較・批判・統合し、仮説立案や理由づけを行うなど、より高次の認知活動が求められる点が特徴である。

したがって、知識構成型ジグソー法は、単なる分担学習を越え、学習者が主体的・協働的に新しい知を生み出すプロセスを重視している点で、従来のジグソー法と異なる。

〈出題の意図〉

受験生が、ジグソー法の手順と目的を理解できているか、メリットとデメリットについて把握しているか、従来のジグソー法と知識構成型ジグソー法の違いを認識できているかにつ

いて判定することを出題の意図としている。

英語圏文化研究 (V) -2 (イギリス文化研究)

〈採点時の評価ポイント〉

イギリス文化研究は、文学、芸術、建築といった幅広いテーマを扱う学問分野であるが、共通するのはこれらのテーマが時代および社会の鏡としての側面を持つという点である。この設問では、関係する人物一人に焦点を当て、その人物の作品や建築物の概要を単に述べるのではなく、それらがどのようにして時代性を反映し、社会に影響を与えてきたのかを具体的な事例を挙げて論述できているかを評価した。

〈出題の意図〉

この設問は、大学院におけるイギリス文化研究実践にあたり、イギリスの歴史・社会に関する基礎的な知識を基盤に、具体的な事例に対して分析・考察を行い、それを論理的に展開できる能力を確認するものである。

【外国語】

英語

1

〈解答および解答例〉

- 設問 1 (1) 地球が太陽のまわりを回っているのであって、その逆ではない。
(2) 星々それ自体はは空を横切って動いているというのに、それらが作る星の集まりは形を変えないパターンを形作っているように思われた。
(3) 人々は、天空に住んでいると信じられていた神々や精霊にちなんで多くの星座に名前を付けた。

設問 2 d

設問 3 … when we [should plant and harvest crops]

設問 4 a

設問 5 惑星が太陽の軌道を周回している理由

〈出典情報〉

Scholastic Children's Encyclopedia, Scholastic Inc.

2

〈解答および解答例〉

哲学者には、問いに答えるのではなく問いを分析するという、いら立たしい癖がある。私もそこから始めたいと思う。「人生の意味とは何か」というのは本物の問いなのか、それとも見かけだけの問いなのか？ それに答えとなり得るものはあるのか、それとも実際には疑似的な問いにすぎないのか。たとえば、伝説的なオックスフォードの試験問題にある「これは良い問いか？」という設問のように。

「人生の意味とは何か」という問いそのものが無意味だと考えるかなりよく知られた理由がある。それは、「意味」というものは事物ではなく言語の問題であるという立場である。意味とは、私たちが物事についてどう語るかの問題であって、物事そのものの性質（質感、重さ、色など）のようなものではない。キャベツや心電図はそれ自体で意味を持つわけではなく、私たちの会話の中に取り込まれて初めて意味を持つことになる。この理論に基づけば、私たちは人生について語ることで人生を意味あるものにするにはできるが、人生そのものには雲と同じように固有の意味はない。たとえば、雲を「真」か「偽」かと語ることに意味がない。むしろ、真や偽というのは、雲についての人間の命題の関数なのである（むしろ、真理や虚偽というものは、雲についての人間の命題から導き出されるものだ）。多くの哲学的議論と同じように、この議論には問題がある。

〈出題の意図〉

- (1) 与えられた文章に対して、英語の基本的な構文や文法を理解し、適切な日本語に訳することができるか。
- (2) 学術的な論述や思考を理解することができるか。

〈出典情報〉

Terry Eagleton, *The Meaning of Life: A Very Short Introduction*. Oxford UP. 2007. 1-2.